

第 37 回経済学会賞(本行賞) 審査講評

第 37 回経済学会賞には 8 本の論文の応募があり、いずれも応募者の学習と研究の成果を示す良作であった。審査委員会は、厳正なる審査の結果、優れた論文として、以下の佳作 3 本を選んだ。

佳作 3 編

平田惣太郎(経済学部4年)

「男性の交際可能性に対する容姿の効果と経済力の効果の比較」

村田淳・財津俊貴(経済学部4年)

「大学祭の経済効果」

金行裕貴(経済学部4年)

「ASEAN における米中印覇権闘争—国際プレゼンスの定量分析—」

以下、受賞論文にたいしての講評を記す。

佳作に選ばれた平田氏の論文は、自ら収集した実験的ビネットサーベイに基づく個票データを用いて、男性の容姿と経済力が彼の交際可能性に与える因果効果を実証的に分析している。

少子化は、主として晩婚化によることが知られている。日本人の結婚の 8 割以上が交際から発展し、未婚男性の 7 割に交際中の異性がないという事実は、交際が結婚、出産にとって重要であることを示している。日本人の交際に関する実証分析は、その学術的・政策的重要性にもかかわらず、わずかしかな存在しない。近年、男性の経済力の低下が晩婚化の要因であるとの主張がある。その一方で、男性の容姿が交際可能性に影響を及ぼすとの主張もある。いずれの主張も、経済力と容姿の間に正の相関が見られる観察データに基づくものであるため、経済力、容姿のそれぞれの因果効果が正確に推定されているとは言い難い。本研究は、実験的ビネットサーベイを行うことによって、先行研究での課題を先行的に解決することを試みたものである。

分析結果については、特定の条件を一定とすると、平均的な顔の男性と比べ、「かっこ良い」顔の男性は、女性と交際できる可能性が 44%も高いことを、また、年収が 240 万円の男性と比べ、年収が 600 万円の男性の交際可能性は 13%しか高くないことを示している。実証分析の結果に基づいて、美容整形への保険適用化など、男性の容姿を改善する政策を提言している点も興味深い。より大きなサンプルを用いれば、説得力が増すに違いないと考えられる。

佳作に選ばれた村田・財津の二氏の論文は、本学で開催されている常盤祭の経済規模とその地域経済にもたらす効果を 2018 年と 2019 年の 2 か年に渡って調査・分析した論文である。

大学祭は全国の多くの大学で毎年開催され、開催校の大学生・OB・OG はもとより他大学の学生、近隣の小中高生、近隣住民、遠方からの来客者も含め多くの来場者数を集めている。大学祭は、大学内のみならず地域住民にとっては比較的ポピュラーなイベントではあるが、その来場者がどういった属性でどのような行動をしているか、大学祭の経済規模自体や地域経済に与える

影響については従来十分に研究されてこなかった。本論文は両著者が 2 年間にわたって常盤祭の実態をアンケート等を通じて調査し、その経済効果を初めて明らかにしようとした意欲的な力作である。

本論文では、常盤祭の経済効果にかんして、①来場者の消費金額、参加団体の売上、機材費、打ち上げ費といった需要額をアンケートで調査し、②横浜市産業連関表を用いた直接効果としての需要額から生じる第一次生産誘発効果と、その効果から発生する所得誘発効果から生じる第二次生産誘発効果を算出することで推定している。両年に渡る調査・推計によって常盤祭の経済効果は 3000 万円～5000 万円と推定されている。本論文では、その効果を横浜市に及ぼす効果に絞りこみ、市内への支出額分を推定している点に特徴がある。アンケート調査および経済効果を推定するための産業連関表を使ったデータのハンドリングも十分にこなしており研究としても十分な水準にあると評価する。

佳作に選ばれた金行氏の論文は、アジアにおけるアメリカと中国のパワーバランスの定量的分析を試みた論文である。

米中の覇権闘争については多くの分野で話題になっているが、その多くが記述的、定性的分析に止まっている。著者は、従来の論評、研究の限界を打破するため、米中およびアジアのもう一つの大国であるインドとアジア諸国との関係に着目した。そして経済のみならず、外交、人的交流、軍事の分野について関係の密接度を示すと思われる指標を収集し、定量的に評価することでアジアにおける米中印の総合的なプレゼンス強度を測ることを試みた。

その結果、ASEAN においては、中国のプレゼンスが最も高く、特にラオス、カンボジア、インドネシア、シンガポールとの関係が密接であることが示されている。また、現状で米中印のプレゼンス強度が高水準で拮抗していることから、マレーシア、ブルネイ、ミャンマーにおいて米中印間の覇権闘争が活発化すると予想している。著者自身が指摘しているとおり、本研究は指標の適切性、時間的カバレッジ、比較可能性、特に情報の制約による軍事分野における指標の適切性、各分野間のウエイト付けの問題、日本要因の欠如等の多くの方法上の問題を残している。教育的観点からは、国際比較可能な社会科学的指標を作成、収集することがいかに困難であるかを理解できたことは今後の著者の糧になると考えられる。限られた指標を発掘、収集、加工し、多くの不明な点を数々の工夫によって克服し、プレゼンスという社会科学的現象を客観的、定量的に描写し評価しようとした著者の真摯な学問的態度と情熱、およびその研究成果は高い評価に値する。

2020 年 3 月 2 日

第 37 回経済学会賞(本行賞)審査委員会

審査委員長:氏川恵次

審査委員:池島祥文、熊野太郎、シュレスタ・ナゲンドラ、鈴木雅貴、無藤望

第 37 回経済学会賞(本行賞)受賞者メッセージ

平田惣太郎

今回は佳作に選んで頂き嬉しい気持ちで一杯です。卒業論文を書いていく中で初めて学問を楽しいと思うようになりました。これからも興味があることを深く掘り下げていきたいです。ご指導頂いた教授には感謝してもきれません。ありがとうございました！

村田淳

このたびは本行賞の佳作に選んでいただき誠にありがとうございます。まさか自分がこのような賞をいただけるとは、夢にも思っていなかったもので、今は嬉しさと驚きでいっぱいです。

私のようなどこにでもいる経済学部生活がこのような賞をいただけたのは、力を貸してくださったみなさまがいたからです。

一緒に一年半研究を続けてきた財津、たくさんのご指導をいただいた居城教授、ゼミの先輩方、困った時に助けてくれたゼミの同期やサークルのみんな、アンケートに答えてくださった皆さま、ならびに協力してくださった全ての方、ありがとうございました。

財津俊貴

このたびは本行賞という名誉ある賞をいただき、ありがとうございます。ご指導いただいた居城教授、先輩方、ならびにご協力いただいた全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。

本研究の始まりは、大学祭実行委員として活動している際に、お金の動きについて素朴な疑問を感じた時です。研究を始めようにも大学祭の経済効果については先行研究も少なく、多くの困難を極めました。しかし多くの手助けの中、本研究が完成し、このような素晴らしい賞もいただけることとなりました。

本研究の始まりのように、今後の自分もさることながら後輩にも、身近な疑問を大切に突き詰めていって欲しいです。

重ねてにはなりますが、名誉ある賞をいただきありがとうございます。